手取カトリック教会とその新旧教会堂について
―教会設立から２代目（現在）の教会堂建設まで―

A Study of the Catholic Church of Tetori, Old and New Building
― From the Beginning to the Construction of the Second Church ―

関根　浩子
Hiroko SEKINE

崇城大学芸術学部美術学科教授
Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：パリ外国宣教会、コール神父、初代の教会堂、ボア神父、棟梁建築家、鉄川與助、２代目の教会堂、鉄筋コンクリート（RC）工法

Keywords: Paris Foreign Missions Society, Father J. M. Corre, the first church building, Father F. Bois, the Master Carpenter Architect, the second church building, RC Method (reinforced concrete structure)

Summary

The Council for Cultural Affairs of Japan had been deciding until quite recently to propose the “Churches and Christian Sites in Nagasaki” as candidates for UNESCO World Cultural Heritage listing in 2016. Of the 14 recommended sites, one belonged to the prefecture of Kumamoto. The only heritage site in Kumamoto was, as it is well known, the village of Sakitsu in Amakusa, which also included the catholic church of Sakitsu (1934). Of the 14 sites of the recommended World Cultural Heritage sites, 5 churches, including the church of Sakitsu, were built by TETSUKAWA Yosuke (1879-1976), an excellent talent in the history of modern Japanese architecture.

The catholic church of Tetori, located in the city of Kumamoto, was also built by Yosuke, known as the “Master Carpenter Architect”, in 1928, when father Bois was active. About this church, however, there are only very simple and approximate descriptions found in commemorative publications of the church of Tetori and of the diocese of Fukuoka, besides a book focused only on that church. There is no reference to the first church, of which we know neither the designer nor the builder.

Therefore, in this report I have sought to clarify, with the help of new materials, the process from the foundation of the church in Tetori to the construction of the two churches, paying special attention to the early one. Then, on the basis of the survey of the churches built by Yosuke, I have made my observation, both on that group of buildings and on Yosuke himself, trying to clarify the position and significance of the second church in his career as a “Master Carpenter Architect”. Finally, I have described the architectural features of the second church and I have clearly indicated that, although not included in the list of cultural heritage candidates, this church, more than the one in Sakitsu, has a very important significance from the point of view of the second evangelization of the catholic church in Japan as well as in the history of modern Japanese architecture.

序

日本では、2013 年 8 月開催の文化庁の文化審議会において「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が同年度の正式推薦候補とされながら、内閣官房地域活性化統合事務局の有識者会議では「明治日本の産業革命遺産」が推薦候補とされ、最終的に後者が当該年度の推薦候補とされて、昨年（2015 年）それがユネスコの世界遺産に登録されたことは記憶に新しい。そして先行して活動していながら推薦を持ち越されてしまった「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の方は、ようやく 2014 年 7 月開催の文化審議会によって 2016 年の世界文化遺産の候補として推薦が決定され、今年夏の世界遺産登録を目指していた。しかし、最近になってイコモスから推薦書の不備を指摘され、キリスト教の禁教と潜伏の時代に重点を置くよう指導されたため、またしても推薦が見送られることになり、今後は構成資産の組み立てまで見直される可能性が出てきた。しかし、今年候補として推薦が予定されていた資産群が、世界遺産に値しないとは稿者は思わない。いずれにしても同候補は、「キリスト教の伝播と普及」、「禁教下の継承」、「解禁後の復帰」を証する 14 資産で構成され、それらのうち 13 資産が長崎県、1 資産が熊本県（但し天草が熊本県に編入されたのは 1876（明治 9）年）[1]に属していた。熊本の 1 資産とは、周知の通り、﨑津カトリック教会堂（1934（昭和 9）年）を含む「天草の﨑津集落」であったが、14 資産のうち﨑津のそれを含め 5 資産に関係する教会堂を建設したのは、緻密な研究に裏付けられて、また世界遺産登録運動とも連動して近年評価が高まっている日本近代建築史上の異才鉄川與助[2]（1879（明治 12）年 − 1976（昭和 51）年）であった。彼は木造、煉瓦造、石造、鉄筋コンクリート造（以下 RC 造と略す）とあらゆる工法に挑んだ大工にして建築家であった。

しかし熊本県には、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産には含まれていなかったものの、同じ鉄川與助が﨑津の教会堂に先行して設計・施工した優れた教会堂がその他にも 2 棟ある。1 棟は、﨑津の教会堂から車で 15 分もかからない大江地区に 1933（昭和 8）年に建設された大江カトリック教会堂である。そしてもう 1 棟は、両棟よりもさらに先行して 1928（昭和 3）年に建設された本稿の考察対象、手取カトリック教会堂（以下手取教会堂と略す）[3]である。

現在の手取教会堂は、熊本市中央区上通町（かつては手取本町）3-34 番地に、主要地方道である 28 号線を行き交う車や人々を見守るように佇んでいる。主要道路沿いの歩道から敷地内に足を進めれば、そこには純白の聖母マリア像が置かれた庭がある。また、聖堂入口の扉を開けて堂内に入ると、そこには簡素な外観からは想像もつかない、まさに「神の家」と呼ぶにふさわしい美しく静謐な空間が展開されている。

手取教会と現在の教会堂については、記述の齟齬や文量の差はあるものの、教会自体が刊行した記念誌[4]や福岡教区刊行の記念誌[5]、また福岡教区のホームページ[6]、その他の九州のカトリック教会堂に関する

刊行物等[7]に紹介が見られるが、それらの記述は極めて簡略である上、同堂だけを単独で扱った報告書も、管見の限り、熊本大学工学部チームが実測調査して図面を添えて紹介した 2004 年の報告書１件[8]に留まっている。さらに設計・施工者不詳の初代の旧教会堂に至っては、単独の論考は皆無である。

そこで本稿では、まず手取教会の設立から初代の教会堂を経て２代目の新教会堂が建設されるまでの経緯や、特に旧教会堂について、新資料も用いながらできる限り明らかにしていきたい。次いで、鉄川自身と彼が建設した教会堂群の工法や特徴を、現地踏査に基づいて概観しながら、彼の聖堂建造歴における２代目の教会堂の位置や意義を明確にする。そして最後に、２代目（現在）の教会堂の建築的特徴について述べ、同教会堂が幾つかの点で﨑津のそれ以上に日本近代建築史上、並びに日本におけるカトリック再布教史上重要な意義をもった教会堂であることを指摘したい。

１．手取カトリック教会とその教会堂の変遷―創設から２代目の教会堂建設まで―

それでは、まず手取教会がどのように設置されたのか、その経緯から見ていくことにしよう。

手取教会は、肥後熊本の最初のカトリック宣教師であったジャン・マリー・コール（Jean Marie Corre, 1850-1911 年／在任：明治 22-28 年）神父（図１）が 1889（明治 22）年に、仲間町 91 番地[9]に家を借りて仮教会堂としたのに始まる。コール師[10]は、1850 年にフランスのブルターニュに生まれ、1875 年に叙階後、外国宣教への希望に燃えてパリ外国宣教会（Missions Étrangères de Paris）に入会し、翌 1876（明治９）年 12 月 30 日には 26 歳の若さで宣教師として長崎の地を踏んだ。そして 13 年後の 1889（明治 22）年２月に大日本帝国憲法が発布され信教の自由が保障されるや、当時の長崎教区長であったジュール・アルフォンソ・クーザン（Jules Alphonse Cousin, 1842-1911 年）司教から、肥後熊本にとって初めてとなる宣教師（司祭）として派遣されたのであった。それは、パリ外国宣教会の本部に送付された 1889 年の南緯代牧区の報告書中で、クーザン司教が、「かつての多数の信者と殉教者を輩出させた偉大な豊かな肥後地区に一人の宣教師と一邦人司祭が送られた。彼らは熊本に居を定めており、そこは県庁所在地と称せられているのみならず、実際に九州全地方の首都であり、…中略…。」[11]（宣教師とはコール師を指す）と報告している通りである。

しかし、信教の自由が保障され切支丹禁教令の高札が撤去されたとはいえ、熊本は「宗教家の天王山」とも呼ばれた程に宣教の難しい所であり、コール師は熊本に入った瞬間から苦難の道を歩くことになった。それでも同師は、手取教会の初代神父として、６度目の転居先である上述の仲間町の家を拠点として布教活動を行い、キリスト教に対する根深い偏見を取り除くことに努めた。この困難な布教活動についても、クーザン司教は本部充ての同年の年次報告中で、「…前略…８月 15 日まで宣教師は担

当地区を隈無く巡回し、協力者と共にすべての町々や重要な村々で説教をした。最初の旅行では 15 箇所の地方で福音を宣べ、二番目の時は 28 の地方で神のみことばを伝え、第三の旅行では別の 15 箇所でイエズス・キリストを告げ知らせる機会を前と同様に全うすることが出来たのである。これらすべてのことをするのは非常に疲れ、力不足も多かったし、また時々侮辱も受けたが…下略…」[12]と報告している。

その後もコール師は、熊本県下一円の宣教を広範囲に亘って指導する一方で、本国の宣教会と特に外部から寄せられた援助によって、1893（明治 26）年に町の中心部に当たる手取本町（現在の上通町）に教会用地として広い土地を購入し、日本家屋風の木造瓦葺の聖堂[13]（図2-1、2-2）と司祭館（宣教師館）を建設した。当時の写真から判断する限り、堂内の信徒席には畳が敷かれている他、オルガンが置かれ、壁には十字架の道行きの各留を表現していると思われる額入りの画像や、それらの上方には十字架も掛けられていたことがわかる。さらに祭壇には、中央に十字架、その左に聖母子の立像が置かれ、右には掛軸が掛けられていたことも識別できる。この木造の聖堂は、翌1894（明治 27）年 7 月 11 日には祝別、落成されたが、稿者が調査した熊本市立図書館所蔵の「熊本市政資料」中の未紹介の『宗教に関する書類』（資料番号 0807）[14]から判断する限り、かなり大きな聖堂であったことは間違いない。この『宗教に関する書類』は、和紙に墨書された諸書類を和綴装で 1 冊にまとめたものであるが、同書類中には、社寺やプロテスタント関係者の届出に混じって、コール師や 2 代目の邦人司祭深堀詮郎師、ショファイユの幼きイエズスの修道会の修道女といったカトリック関係者が熊本市役所に提出した、熊本県知事宛ての熊本と八代のカトリック教会や女子修道会関連の届出が含まれている。それらのうち、コール師名の熊本に関する届出だけに限って挙げれば、「宣教届」（七）（42）、「履歴書」（七）（43-44）[15]（いずれも明治 32 年 10 月 2 日受付　第 226 號）、「講義所既設届」（一〇）（49-50）、「公教會堂既設届」（一一）（51-52）（いずれも明治 32 年 10 月 2 日受付　第 228 號）、届出名のない敷地建物に関する絵図面を添えた明治 32 年 10 月 30 日の日付のある届け（一一）（53-55、58）（数字は整理番号を示す）となるが、それらの資料には設立理由や当時の教会の名称、宗教の方法、管理及び維持、担当布教者の資格や選定方法だけでなく、教会堂や講義所の敷地内における位置や教会の住所、敷地面積等も記されている。

住所については、「宣教届」（七）（42）は次のように記している。

「　宣教届

私儀從前ヨリ宗教ノ宣布ニ從事致候間別紙履歴書相添左記事項ヲ具シ此段御届申上候也

一宗教ノ名稱　公教（Catholica Religio）
カトリカレリジオ

二布教ノ方法　説教及ビ講義ヲ以テシ又ハ處々巡回説教ヲ為ス等ヲ以テ其方法トス

但シ説教ハ熊本市手取本町拾六番地日本聖母堂及ビ八代郡八代東本町三拾五番地殉教者聖母堂ニ於テ爲シ講

義ハ熊本市手取本町三拾七番地及ビ仝市上林町五拾八番地講義所ニ於テ爲シ巡回説教ハ致ル處

便宜ニ依リ處々他人ノ宅ニ於テ爲ス

明治三十二年九月廿六日

ジ、エム、コール

J. M. Corre m.ap（サイン）

熊本縣知事徳久恒範殿」

（下線は稿者による）

また敷地や建坪、信者席については、「公教会既設届」（一一）（50-52）が、

「　公教会既設届

公教會堂ハ明治二十六年二月ヨリ設立致シ来リタルモノニ有之依テ左記事項御届申上候也

一設立ヲ要スル理由

…中略…

二名稱　本會堂ハ日本聖母堂ト稱シ熊本市手取本町拾六番地ニアリテ敷地千三百四拾五坪三合四勺　建坪三拾二坪二合五勺ニシテ内部ノ設備ハ内ニ坪ヲ以テ納室（祭服及ビ祭器等ヲ納ル所）ニ充テ三坪ヲ祭壇ニ取リ三拾六畳ノ場ヲ信徒拝禮ノ席トス

…下略…

熊本市手取本町拾六番地

日本聖母堂管理者

ジ、エム、コール　J. M. Corre m.ap

明治三十二年二月二十六日

熊本縣知事徳久恒範殿」

（下線は稿者による）

と記している。そして手取教会堂は、当時は「日本聖母堂」と呼ばれていたものの、添付された敷地（1,345 坪３合６勺）の図面（図３）[16]と、昭和２年刊行の熊本中心部の地図（実測番地入早わかり最新版熊本市街地図）（図４）[17]とを比較する限り、教会の場所については現在の上通町３丁目 34 番地とほぼ同位置の手取本町 16 番地にあり、敷地面積もほぼ同じであったことが確認できる。さらに講義所（宣教師住居や納屋、玄関等を含む）（図５、６）は、現在主要地方道 28 号線を挟んで教会堂の向かいに立っている鶴屋百貨店の敷地の一角のかつての手取本町 37 番地（図４）と、さらに現在も同じ名称の上林町のかつての 58 番地（図７）にあったことが確認される。さらに建坪 32 坪２合５勺の教会堂には、玄関と２坪の納室があり、３坪が祭壇、36 畳[18]分が信徒席に充てられていたことも図面や届出書類から確認される。しかし、最初の日本家屋風教会堂を施工した人物（おそらくは邦人大工）が誰であったかについては、いずれの資料も沈黙を守っている。

コール師の帰天後は、手取教会では既に明治 27 年以来同師と協力してきた深堀詮郎神父（1865（慶応元）－1917（大正６）年／在任 1895（明治28）－1917（大正６）年）が後任となり、その後はジョゼフ・ベルナール・フェリエ（Joseph Bernard Ferrie, 1856-1919 年／在任 1917（大正６）-1919（大正８）年）神父が着任したが、フェリエ師はリューマチの病苦の只中にあったため、八代教会のフランソア・ルマリエ（François Lemarié, 1867-1945 年）[19]師が手取に来てミサを捧げるなどして助け、フェリエ師帰天後は次の司祭が着任するまでの間、手取教会の司牧を兼任していたが、ようやく待望の司祭が手取に着任すること

になった。その神父こそ、在任期間中に２代目の新教会堂の建設を実現させることになるフレデリック・ボア（Frédéric Bois, 1888-1977 年／在任：1919（大正８）-1932（昭和７）年）師[20]（図８）であった。

手取の第４代司祭となったボア神父は、1888 年にシャンベリー区サヴォアで生まれ、1906 年にパリ外国宣教会に入会、1912 年に叙階された。続いて同年のうちに来日して宮崎で約１年間日本語を学んだが、第１次世界大戦が勃発し、フランスに帰国して陸軍の従軍兵となった。日本に再来日したのは 1919（大正８）年のことで、10 月 29 日、陸軍士官上がりの溌剌とした姿を熊本の地に現した。クーザン司教は、宣教会本部に送った 1920 年の年次報告中[21]で、ボア師が信徒に熱烈に迎えられた様子を伝えている。ボア師は、気骨に溢れ、また実行力に富み、元気で明朗なその人柄で、信徒と親しく交わりながら全信徒を１つの共同体としてまとめた。司牧のほか子供の教育にも力を注いだが、手取での司牧 12 年の間に起こった最も顕著なことは、先に指摘した新教会堂の建設であった。コール師時代に建てられた木造の教会堂は老朽化し、また信徒数の増加によって狭隘になっていた。そこでボア師は、旧教会堂を工事前に東側[22]に移し、旧教会堂があった位置に、1927（昭和２）年に新時代にふさわしい RC 造で教会堂建設を着工させたのである。工事発注者は従って熊本公教会であり、それを設計・施工したのが既述の鉄川與助（図９）であった。しかし、與助が手取教会堂の建設に関わったことを証する資料は見出されておらず[23]、唯一、上五島の鯨賓館ミュージアムが所蔵している彼の遺品中に、建設に関わったことを偲ばせる「熊本市手取本町天主堂工場」と住所を印刷した未使用の年賀状（図 10）[24]が確認されるのみである。建設資金はごく一部は日本人信徒の拠金によるものであったが、その大部分はフランス本国の信徒の寄付に拠るものであった[25]。２代目の教会堂は翌年５月に竣工し、コール師が建てた初代の教会堂と同様に、「日本の聖母」に献堂された。竣工当時は福岡教区が独立して間もない頃で、教区の司教に任命、叙階されて間もないフェルディナン・ジャン・ジョゼフ・チリー（Ferdinand Jean Joseph Thiry, 1884-1930 年）司教が、５月 24 日にそれを祝別した。落成時の信徒たちの感動は、とりわけその天井の美しさを讃えた祝歌[26]によく表現されている。翌昭和４年８月 19 日には、フランスから贈られた約 700 kg の釣鐘が鐘楼に収められ、戦時下に供出を強いられるまで、15 年に亘って１日３回鳴らされ、教会の存在を知らせるシンボル的な役割を果たした。

その他にも、ボア師は、教会敷地の整備に着手して、伝道館の増改築や煉瓦塀の構築、司祭館裏側の鉄門扉の取り付け等を行って新聖堂周辺の環境整備を行った他、最終的にコール師時代の司祭館を新築したあと、大名町カトリック教会伝道館に開設された福岡公教神学校[27]の初代校長に就任するために、1932（昭和７）年２月、熊本を離れた[28]。

２.「棟梁建築家」鉄川與助とその教会堂群

さて、１章では、新資料も用いながら、コール師によって手取本町に教会が置かれ、間もなく初代の教会堂も木造で建てられ、やがてボア師時代に２代目の鉄筋コンクリート造りの教会堂が鉄川與助によって建設されるに至るまでの流れを、可能な限り明らかにした。続いて本章では、２代目の教会堂を設計、施工した鉄川與助がどのような人物であり、また、どのような建造物を手掛けたのかを教会堂を中心に見ていくが、戦後の作品は、與助個人というよりは鉄川工務店の仕事と考えられるため、ここでは戦前に彼が建設した教会堂のみを先行研究を参考にしながら概観していく（以下、列挙する教会堂の名称には「カトリック」の語を略す）。

宣教師から西洋建築技術を学んだため、単なる「大工棟梁」ではなく「建築家」とも呼びうる故に、先行研究者たちが「棟梁建築家」[29]と呼んでいる鉄川與助は、1879（明治 12）年１月 13 日、五島列島の中通島、長崎県南松浦郡新魚目町丸尾郷（現・南松浦郡新上五島町）に、大工棟梁、鉄川与四郎、フミの３男、３女の長男として生まれた[30]。生家は代々大工棟梁の家系で、與助の祖父は富江侯の御用大工であったという記録もあり、地元の建築界では知られた一家であった[31]。1894（明治 27）年、15 歳で南松浦郡榎尋常高等小学校卒業後は大工修業に入ったが、1901（明治 34）年、福江の大工町の棟梁、野原与吉が魚目村に曽根天主堂を建設した際、近在に住んでいた與助はそれを手伝った[32]。野原は当時、アルベール・シャルル・アルセーヌ・ペルー（Albert Charles Arsène Pelu, 1848-1918年）神父[33]の指導下に、五島地方における天主堂建設に積極的に取り組んでいた数少ない棟梁の１人であり、曽根天主堂の建設も設計者であるペルー神父の指導下で建設したものであった。ペルーは建築学に精通し、五島に幾つかの教会堂を設計した神父であるが、曽根の仕事において與助の力を認め、リブ・ヴォールト天井[34]の工法や幾何学など、多くのことを與助に教示した。西洋建築を殆ど見たことがなかった與助は、同神父の指導によって次第に腕を上げ、1903（明治 36）年には同神父設計の旧鯛ノ浦教会堂の建造に携わった。また、1906（明治 39）年には、與助の他、大工である鉄川一家が中心となって旧桐教会堂[35]の増改築工事を行った。そして同年には、與助は 27 歳にして父与四郎から家業を相続し、鉄川組を編成した。

続いて家業を相続した翌年の 1907（明治40）年、28 歳になった與助は、自身の家に近い冷水に記念すべき冷水教会堂（図 11）を建設した。同堂は與助が棟梁として初めて設計・施工した聖堂であった。今も教会堂として使用されているこの聖堂は、３身廊の堂内に洋風のリブ・ヴォールト天井を組み込んではいるものの、天井の低い伝統的な木造平屋建ての小屋組に切妻屋根を載せ、正面中央に小さな鐘塔を設けただけの簡素な教会堂である。

続く1908（明治 41）年には、與助は、工部大学校（現東京大学工学部）等を卒業したエリート建築家たちが主な会員であっ

た日本建築学会準員[36]となる一方、おそらくは野原与吉とともに煉瓦造の堂崎教会堂（明治 41 年）（県指定有形文化財）の建造に携わり[37]、さらに五島列島の北に位置する野島崎に若干 29 歳にして旧野首教会堂（県指定有形文化財）を完成させた。この聖堂は、與助単独の初めての煉瓦造の天主堂で、入口アーチの要石には星が刻まれ、正面の屋根の上には、中世ヨーロッパの城郭様式に見られる峡間胸壁のような装飾が３ヶ所に施されている。本教会堂では、與助は堂崎で修得した技術を遺憾なく発揮しているばかりでなく、堂崎の煉瓦がアメリカ積みであるのに対して、ここではイギリス積みを採用し、より堅牢な構造を志向してさえいる。３身廊の堂内にはリブ・ヴォールト天井が採用されているが、西洋のゴシック聖堂のような高さはないため、空間には荘厳さというよりはリズミカルな軽快感が付与されている。

旧野首聖堂に次いで、1910（明治 43）年に與助が完成させたのは、現在重要文化財に指定されているやはり煉瓦造の青砂ヶ浦教会堂（図 12）である。中通島の奈摩湾を見下ろす山の中腹に建設されたこの３作目の聖堂では、屋根を重層（２層）にすることで、今までに見られない高さと大きさが具現されている。高くなった主廊のリブ・ヴォールト天井は、３身廊の堂内に縦の空間軸を生み出しており、聖堂の空間として完成体に近づきつつあることを感じさせる。

続いて同じ明治 43 年[38]に、與助は下五島の岐宿町東楠原に、チリー神父の指導下で同様に煉瓦造、３廊式、リブ・ヴォールト天井の楠原教会堂を建設した。主廊は２層分の高さを有している。なお、この頃には、與助の名前は長崎、福岡でも知られるようになっており、仕事の依頼は五島以外の地からも届き始めるようになる。

こうして明治 44 年、32 歳時には、佐賀県に佐賀教会堂（木造、現存せず）、長崎の生月町山田免に煉瓦造の山田教会堂を建設した。後者は３廊式でリブ・ヴォールト板張天井、漆喰塗白壁で構成されていたが、昭和 45 年に鐘塔がコンクリート造に改築され、外壁も全面漆喰塗の白壁に変えられてしまったため、当初の面影は残っていない。なおこの頃、與助は M. M. ド・ロ（Marc Marie de Rotz, 1840-1914年）神父と出会い、同神父から、石灰の使い方やモルタルの塗り方、基礎工事法などの実地的な建築技術のほか、土地の材料を使用してより経済的、より堅牢に造るという教会堂の設計思想などを学んで大きな影響を受けた。1915（大正４）年に完成した大浦教会堂の煉瓦造の司祭館建設に際しては、ド・ロ神父が設計し、與助が図面を引いて施工した。與助が影響を受けたもう１人の人物に P. T. フレノ（Pierre Théodore Fraineau, 1847-1911年）神父がいる。フレノ神父は、図面を引かず、頭の中の構想だけで天主堂を建てるという天才的な人物で、この頃旧浦上教会堂を建設していた。着工以来30 年もの歳月をかけて建設された同聖堂では、與助は東洋一の大きさを誇った２つの塔のドーム部分を造ったとされる[39]。そして以後、鉄川與助は塔をもった天主堂を建設するようになっていく。

福岡県大刀洗町に 1913（大正２）年に

完成された今村教会堂（図 13）は、煉瓦造の頂点を極めたと評される教会堂である。ファサードは、天に聳える２つの鐘塔を有しているほか、ロンバルド帯[40]で３層に分けられ、それは軒下にも及んでいる。ロマネスク建築に多用される要素を取り入れたこの聖堂は、それまでの教会堂とは一線を画した個性を放っている。堂内には初めて高窓が設けられ、教会堂に求められる要素がすべて揃って完全な３層構成（列柱と半円アーチが並ぶアーケード、トリフォリウム、採光用の高窓（クリアストリー））が実現された。さらに高くなった天井と高窓からの光が聖堂内を荘厳かつ華麗に彩っているこの内部空間は、会堂の空間として完成の域に達したといえる。

今村教会堂で煉瓦造教会堂が完成の域に達したとはいえ、與助の教会堂建築の追求はそれで終わりではなかった。與助はその後も、1914（大正３）年に宮崎県に木造の宮崎教会堂（現存せず）、1916（大正５）年に再び長崎県（現南松浦郡上五島町大曽）に煉瓦造で３廊式の大曽教会堂（県指定有形文化財）、その翌年の1917（大正６）年には同じ長崎県（現南松浦郡新魚目町曽根郷大水）に木造の旧大水教会堂[41]と、休む間もなく次々と教会堂を建設していった。そして続く1918（大正７）年には、39 歳で木造教会堂の最高傑作とされ、重要文化財にも指定されている江上教会堂を長崎県五島市に建て、さらに長崎県の北西部にあたる松浦半島の突端（平戸市）に、これもまた重要文化財に指定されている煉瓦造の田平教会堂（図 14）を完成させた。平戸島を望む丘の上に立つ後者の教会堂も、與助が煉瓦造教会建築で到達したスタイルで建設されているが、双塔の今村教会堂とは異なり、正面中央に方形の単塔を配している。高く真っ白なリブ・ヴォールト天井をもつ堂内は３廊式で、今村におけると同様、３層構成が取り入れられている。しかし、この教会堂の最大の特徴は、煉瓦を装飾材として極め尽くした点にある。濃い色の煉瓦で色の変化をつけ、役物と呼ぶ特殊煉瓦も使用された他、煤に油を混ぜ、黒く染めた煉瓦も使用された[42]。そして與助の煉瓦造教会堂建設はこの田平教会堂をもって最後となり、やがて彼は新しい工法である RC 造による教会堂建設へと移行していく。

それぞれ木造、煉瓦造の江上天主堂、田平教会堂を完成させた後、1922（大正 11）年に RC 造の長崎神学校を竣工させるまでの間に、與助はさらに、彼にとって唯一の石造建築であり重要文化財にも指定されている頭ヶ島教会堂（図 15）を、1919（大正８）年、中通島の東端に沿う小島に建設している。石造教会堂は全国的にも珍しく、長崎県下では本堂を含めわずか２例が知られるにすぎない。規模は 42 坪と小振りながら、どっしりとした粗石積みが堅牢で重厚な印象を与えている。堂内は、２重の持送りによって折り上げられた折上天井（船底天井）[43]となっており、天井から壁に至るまで、淡い色調の可憐な花のレリーフで飾られている。小さな建物にリブ・ヴォールト天井を用いることには無理があったため、與助はこの難局を折上天井の採用によって乗り越えたのである。その他、1920（大正９）年には今は崩れ落ちて

しまった旧細石流教会堂を長崎県福江市猪木町に木造で、また1921（大正 10）年には、これも今は現存していない平蔵教会堂を五島の平蔵町に同じく木造で建設している。そして、1925（大正 14）年の旧浦上教会堂の双塔完成を経て昭和に入った1928（昭和３）年に、熊本市手取本町にRC 造で手取教会堂を完成させた。それは與助 49 歳のことであったが、本聖堂については次章で詳述する。

手取教会堂の後は、1929（昭和４）年に福岡県大牟田市に大牟田教会堂（現存せず）を木造で建設し、次いで今度は長崎県の平戸島に２棟目となる RC 造の紐差教会堂（図 16）を建設した。この後者の白亜の教会堂は、長崎県では初の RC 造で、外観は田平や頭ヶ島教会堂のスタイルをほぼ踏襲し、正面に八角ドームを載せた方形の鐘塔を配している。外壁にロンバルド帯を巡らせている以外、装飾らしい装飾はなく、全体にすっきりと洗練された佇まいを見せている。堂内は３廊式で、天井は壮大な折上格天井となっている。そして白い梁で区切られた各格間には、幾何学模様と清潔感のある花のレリーフが施されている。それは日本の豪華な格天井を彷彿させる。

その後も與助は、1930（昭和５）年に福岡県の八幡と戸畑にそれぞれ八幡教会堂と戸畑教会堂を木造で建設したが、いずれも現存していない。次いで 1933（昭和８）年には、現在は熊本県に属する天草の大江と福岡県の新田原、さらに熊本県の水俣に、それぞれ大江教会堂（RC 造）、新田原教会堂（木造、現存せず）、水俣教会堂（木造、現存せず）を建設した。続いて 1935（昭和 10）年には、天草の﨑津と福岡県の小倉に、それぞれ﨑津教会堂（木造、一部RC）、小倉教会堂（木造、一部鉄骨造）を建設したが、後者は現存していない。

そして日中戦争が始まって間もない1938（昭和 13）年に、下五島南松浦郡に木造、３廊式、リブ・ヴォールト天井の水ノ浦教会堂を建設した。この教会堂は、様式を踏襲して設計した鉄川與助最後の聖堂であり、外壁は清楚な白い板張り、軒下には繊細なレース状の彫刻飾りが付けられており、堂内の信徒を包み込むように大きく弧を描く白漆喰のヴォールト天井ともども、女性的な雰囲気の佇まいを見せて今も水ノ浦湾を見守っている。

以上のように、鉄川與助は、出身地である五島列島での教会堂建築を皮切りに、長崎県本土から遠くは宮崎県まで、その建設範囲を拡大していった。昭和期に入ると学校や宿舎などの世俗建築の比率が高くなっていったが、それらの建築も教会堂同様、手抜きをしない與助の仕事への厳しい姿勢を証拠立てるように堅牢かつ頑強であった。戦時中の 1944（昭和 19）年、鉄川組は企業整備令によって第一土建に統合されて一端姿を消すが、戦後の 1949（昭和 24）年、統合前の状態に戻し、鉄川組を鉄川工務店と改称した。またこの年、與助は家督を息子の与八郎に譲った。1958（昭和 33）年、79 歳の時に鉄川工務店を株式会社として会長に就任したが、現役引退後も鉄川工務店の建設現場を見て回るのを日課としていたとされる。1959（昭和 34）年、黄綬褒章、1967（昭和 42）年には勲五等瑞宝章を授与され、1976（昭和 51）年、97 歳で

死去した。

仏教徒であり続けながら、生涯を教会堂建築に捧げた鉄川與助の生き様は、末弟子の山本栄吉が、師、與助について語った「すべてのことに正面から立ち向かう。正直すぎるほど正直な。くよくよしない。思いやり深い。堂々とした。別け隔てをしない。失敗を恐れない。一途な……」[44]という言葉に集約されている。

３．鉄筋コンクリート造建築と２代目の手取カトリック教会堂

さて、これまで概観してきたように、鉄川與助は五島列島と長崎県を中心として九州に数多くのカトリック教会堂を設計・施工した。その数は戦前のものだけでもおよそ30 棟に及んでいる。それらのうち半数は現存し、しかも４棟もの教会堂が国指定重要文化財に指定されている。教会堂建設に関わり始めた 22 歳（明治 34 年）から水ノ浦教会堂を建設した戦前の 37 歳（昭和 10 年）までの間では、手取教会堂は上述のように昭和初め（３年）に位置していた。そして木造から始まり、煉瓦造、石造を試みた後、與助が最後に挑んだ工法である RC 造によって建設されたものであった。

現存している同教会堂の具体的な外観や堂内の建築意匠の特徴を熊本大学チームによる 2004 年の報告書[45]を参考に述べれば、まず外観（図 17）は単層屋根構成で、屋根は切妻瓦葺きとなっている。ファサード中央部には方形の鐘塔が設けられ、さらにその頂部には八角形のドームが架されている。鐘塔の４面および正面には、石造を想起させる水平の溝やロンバルディアベルトが刻まれている。鐘塔は３層構成となっている。第１層では、アーチ型開口部が玄関となっており、開口部の両側に置かれた側柱が上部の３重になった円形アーチを支えている。第２層にはデザイン化された丸窓が置かれ、その上の第３層には２連アーチ型の窓（開口部）が設けられている。また、正面入口の左右の壁面と聖堂側壁には、柱間ごとに縦長の円形アーチ型の窓が設けられている。さらに、聖堂の左右の側壁にはそれぞれ、中央よりやや内陣寄りの所に切妻屋根を架した出入口（図 18）が設けられている。なお玄関部は、聖堂の第１間に身廊と同じ幅で入り込み、その上階は板敷（寄木張）の楽廊となっている。

次いで堂内を見れば、堂内は３廊式（図 19）で、主廊部正面の多角形の内陣に主祭壇、両側廊部正面にもそれぞれ副祭壇が置かれている。多角形の内陣上方の壁面には１面に１つずつ縦長の円形アーチ型の窓が開けられている。また、主祭壇の裏側は香具室となっている。主廊部の幅は 20.1 尺、側廊幅は８尺、列柱の間隔は 11 尺で、主廊の幅が比較的大きいのが特徴である。天井は、主廊部、側廊部とも折上格天井となっている。天井面の太い格縁は露出した梁、すなわち構造材そのもので、構造材を内部の意匠と一体化させた最初期の装飾例となっている。各格縁には、菱形や矩形の中に花柄を意匠化したレリーフ装飾（図 20）が一面に施され、列柱間に設けられた半円アーチ型アーケード上の長方形の小壁にも花柄を意匠化したレリーフが施されている。列柱は円柱で、台座と植物文様が付

された柱頭をもっている。堂内は白を基調としているが、レリーフの可憐な花弁に淡い桃色の彩色が施されているため、堂内全体が温かみを帯びた雰囲気を醸し出している。

ところで、日本で最初にRC建築が登場したのは1911（明治44）年のことで、三井物産横浜支店がそれであったが、当時RCは材料費が高く、技術的にも未熟で主流となるものではなかった。しかし、1923（大正12）年に起きた関東大震災がその状況を一変させた。多くの煉瓦造り、石造建築が倒壊したため、地震や火災に強いRC造が推奨されるようになったのである。とはいえ、RC造は誰でも容易に用いることができる工法ではなく、本格的な普及は、建築学会によってRCの標準仕様書や構造基準案がそれぞれ1929（昭和４）年、1933（昭和８）年に発表されて以降のことであった。しかし與助は、建築学会で様々な知識を得ながら、独学で難しいコンクリート工学を学び[46]、驚くことに関東大震災が起こる前年の1922（大正11）年に、早くも最初のRC造となる長崎神学校を建設していたのである。そしてRC造の最初の教会堂である手取教会堂も、その６年後には建設していた。さらに1929（昭和４）年には平戸の紐差教会堂、1933（昭和８）年には天草の大江教会堂と、立て続けにRC造で教会堂を建設したのである。與助をこの工法の研究に向かわせたきっかけについては、自分が建造してきたいわゆる擬似洋風建築への疑問の他に、地盤が良好ではない場所に煉瓦造で今村教会堂を建設した時の経験であったことが指摘されている[47]。與助は、RC造こそ、地盤がよくない場所でも安心して施工できる工法と考えたのに違いない。

さらに、與助の以上のRC造の３棟の教会堂は、直後に長崎県下に昭和５、６年に限って同じ工法で建設された下神崎教会堂（昭和５年）や平戸教会堂（昭和６年）、馬込教会堂（昭和６年）、浜脇教会堂（昭和６年）、三浦町教会堂（昭和６年）とは、屋根の構成や、ファサードの塔の高さや形態、堂内の天井構成等が明らかに異なっている。後５棟は重層屋根構成でトリフォリウムを備え、さらにファサード中央部には垂直性の強い高い尖塔を設け、天井はリブ・ヴォールト天井となっている。これに対し、與助の教会堂は、紐差のそれを別として、単層屋根構成で、ファサード中央部に方形の鐘塔を設け、その頂上に８角形のドームを架している。また、天井は折上天井となっている。一見すると、與助の３棟は大曽教会堂や田平教会堂といった自身の旧形態を踏襲していて発展性はないように見え、後５棟が長崎における教会堂建築の発展形であるように見える。しかし、川上秀人氏によれば、與助の３棟は折上天井による内部空間を構造と密着させて、それを将来の教会堂建築像として提示したものであり、與助の自信とデザインの先駆性を示すものと考えられる[48]。

與助をRC造に挑ませるに至ったきっかけが何であったにせよ、また３棟が彼の自信を示す先駆的なデザインであったか否かは別として、３棟のうちの最初の聖堂である手取教会堂は見るからに堅牢に建設されており、今も信徒の祈りの場であり続けて

いる。

結　論

以上、１章では、手取教会が、カトリックの日本における再布教の初期に活躍したパリ外国宣教会所属のコール師によって設立された熊本で最初のカトリック教会であったことや、その最初の教会堂がコール師が手取本町に購入した土地に不詳の人物によって建設された木造であったこと、また２代目（現在）の教会堂も同じパリ外国宣教会から派遣されたボア師時代に、鉄川與助によって建設されたこと等を、僅少な文献や資料を基に可能な限り跡付けた。特に、「熊本市政資料」中に見出した『宗教に関する書類』（資料番号 0807）の一部である「宣教届」や、図面が添付された「公教会既設届」、またパリ外国宣教会の年次報告中の記述等から、手取本町の初期の教会の敷地面積や、初代の教会堂や講義所などの位置や建坪、間取り等も視覚的に明らかにすることができた。

続いて２章では、２代目の新聖堂を設計・施工した鉄川與助の初期から戦前までの聖堂建造歴を概観することで、「棟梁建築家」鉄川與助の特異性と、木造から煉瓦造、石造、そして RC 造へと歩みを止めることなく展開していった彼のあくなき探究心について指摘し、併せて、彼の建造歴における手取教会堂の位置も確認した。

そして最後の３章では、現在の手取教会堂の建築的外観や堂内の建築意匠等の特徴について述べた後、同教会堂が、與助が独学で研究した最後の工法である RC 造で建設された最初の教会堂であり、しかも日本における RC 造の普及に先行して建設された先駆的なデザインの教会堂であったことを指摘した。

以上の概観や解明、考察事項から、手取教会堂は、仕切り直しを求められた「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」のリストには含まれていなかったものの、﨑津のそれ以上に、日本近代建築史上並びに日本におけるカトリック再布教史上重要な価値と意義をもった教会堂であると稿者は結論づけたい。

［註］

⑴　天草諸島は島原の乱（寛永14（1637）～15年）後天領となり、長崎奉行の管轄下に置かれていた。長崎奉行の後進である長崎裁判所から独立する形で富岡県が設置され、２ヶ月後に天草県に改称されたが、わずか４ヶ月で長崎裁判所の後進の長崎府に編入された。明治４（1871）年には第１次府県統合で八代県に、さらに明治９（1876）年には第２次府県統合で熊本県に編入された。

⑵　喜田信代、羽深久夫、本間博文「江上天主堂の祭壇と鉄川與助の役割」『日本建築学会大会学術講演梗概集』（九州）（2007 年８月　498 頁）の註１によれば、戸籍や叙勲関係書類では、「与助」ではなく「與助」とされているという。従って本稿でも、以下「與助」と表記する。

⑶　本稿では、手取教会堂に限らず、他の聖堂についても「天主堂」等の通称は用いず、「教会堂」とする。

⑷　宣教百周年記念事業実行委員会編集『宣教百年の歩み　手取カトリック教会宣教百

周年記念誌』手取カトリック教会　1989 年

⑸伊藤誠二監修『萌芽　福岡教区 50 年の歩み』カトリック福岡教区　昭和 53 年／『カトリック福岡教区 75 周年資料集』福岡教区信徒使徒職協議会　2009 年 12 月

⑹　http://fukuoka.catholic.jp/church.html

⑺　日本建築学会『総覧　日本の建築　第９巻／九州・沖縄』新建築社　1988 年　225 頁／三沢博昭・川上秀人　他『三沢博昭写真集　大いなる遺産　長崎の教会』智書房　2000 年／八木谷涼子編『日本の教会をたずねて』別冊太陽 119　平凡社　2002 年　４～43 頁／鈴木功『西海の天主堂を訪ねて』心力舎　2003 年　232～233 頁／雑賀雄二『天主堂　光の建築』淡交社　2004 年／木下陽一『天主堂物語』海鳥社　2004 年　119～120 頁、137 頁／井出道雄『西海の天主堂路』智書房　2009 年　194～195 頁／米山勇監修『日本近代建築大全　＜西日本篇＞』講談社　2010 年　260 頁／板倉元幸『昭和末期の長崎天主堂巡礼』株式会社 ART BOX インターナショナル　2014 年　194～195 頁　など

⑻　渡邊宏史、中川明子、伊藤重剛「手取教会堂の実測調査研究」『日本建築学会九州支部研究報告』第 43 号　2004 年３月　581～584 頁

⑼　宣教百周年記念事業実行委員会編集『前掲書』34 頁によれば、コール神父と新司祭の佐々木真末師は、仲間町に落ち着くまでのわずか９ヶ月の間に既に５回も転居していた。コール師来熊の１週間前の明治 22 年３月７日に住居を確保するため派遣された佐々木師は、コール師到着日に洗馬町に２人の住居を見つけたが、理由は定かでないものの、同師の到着後に入居しようとしたのはそこではなく小幡町の家であった。しかし、外国人による布教目的であることを知った家主に契約を破棄され、翌３月 16 日には新たに家を探し始め、やっと薬園町 70 番地に家を借りることができ、翌 17 日には移転した。しかし同年９月 24 日には、２人は薬園町から山崎町 31 番地に転居し、さらに 10 月 28 日には鷹匠町 55 番地、12 月６日には仲間町 91 番地に移転した。この事実は、排外、排耶思想が根強い熊本での布教の困難さを物語っている。なお、伊藤『同上』28 頁では、コール神父がとりあえず拠点とした家は、仲間町 91 番地ではなく、西岸寺町（現在の下通２丁目）とされている。

⑽　コール師については、明治 32 年９月 26 日に作成され、10 月２日に熊本市役所が受け付けた「履歴書」（第 226 號）が、「熊本市政資料」の原史料番号 0807「宗教に関する書類」（七）（43）中に現存している。同履歴書には、以下のようにある。

「履歴書

住所　熊本市手取本町拾六番地

国籍　佛国フィニステル縣ブレス郡
プルーガステル村
宣教師ジ、エム、コール
四拾九年二ヶ月

一西暦千八百六拾年九月プルーガステル小學校へ入學仝千八百六拾五年四月卒業

一仝年五月ポンコロワ中學校へ入學仝千八百七拾年八月卒業

一仝年十月ケンペール市神學大學校へ入學仝千八百七拾四年八月九日卒業

一仝年八月九日宣教師ノ位階ヲ授カリ仝年九月フィニステル縣ポンラベ市教會ニ在

勤
一仝千八百七拾五年九月パリニ於ケル外国派遣大學校へ入學仝千八百七十六年十一月二日卒業
一仝年十二月廿九日日本国へ渡来長崎市ニ於テ仝千八百七拾八年迄日本語學ヲ専修シ仝千八百八拾年三月迄長崎市ニ布教ヲ爲ス
一仝年仝月ヨリ仝千八百八拾九年三月迄長崎神學校ニ於テ哲學及ビ神學ノ教授ヲ爲ス
一仝年三月十四日熊本市ニ来リ布教ヲ爲シ且ツ慈善業ヲ營メリ
一賞罰事項ナシ
右之通無相違候也
明治三十二年九月二十六日
ジ、エム、コール
J. M. Corre m. ap（サイン）」

その他のコール師の主な事績、経歴としては、周知のように、ショファイユの幼きイエズス修道会を招き、孤児の世話や伝道婦の養成に当たらせ、診療所（現聖心病院）を開き、中尾丸に癩病患者を収容、シスターたちと共にその救助に尽力したことや、さらにマリアの宣教者フランシスコ修道会を熊本に招き癩病院の経営を委託したことなどが挙げられる。また、1893 年には八代カトリック教会の主任司祭となって、シャルトル聖パウロ修道女会を招いて貧困者の施療、孤児の救済を依頼した後、1896 年にはさらに人吉に入って教会設置のための基礎づくりに当たり、後にマリアの宣教者フランシスコ修道会を招いた。以上の３女子修道会と緊密に協力し合って奉仕を継続した業績から、「熊本の使徒」と呼ばれる。1906（明治 39）年には、社会・教育事業に尽くした在熊 22 年の功績を称えて外国人には珍しい藍綬褒章を授与された後、1911（明治 44）年、手取本町の質素な司祭館の一室で帰天（佐無田斌『カトリック人吉教会の 100 年　1899-1999 年』カトリック人吉教会　2001 年　７－８頁／宣教百周年記念事業実行委員会編集『前掲書』38 頁／伊藤誠二監修『前掲書』29頁）。

⑾　松村菅和／女子カルメル修道会共訳『パリ外国宣教会年次報告１　1846-1893』聖母の騎士社　1996 年　184～185 頁

⑿　松村『同上』185 頁

⒀　松村『同上』330 頁の 1893 年の年次報告中では、聖堂と宣教師館ではなく、「…コール師は熊本の拠点のために非常に良い場所、町の中心部に広い土地を二か所手に入れることが出来た。一つは宣教師館に、他は男子求道者の為の要理教室にあてられる。…」とされている。

⒁　稿者は最初「熊本市総務厚生課歴史文書資料室」で資料調査をしたが、同資料室にあったのは熊本市立図書館が所蔵する原史料の複写物（Ｂ４サイズ）であり、記述事項が長い場合を除き、１事項はほぼＢ４用紙１枚にまとめられており、原史料には施されていないナンバリングも用紙の左上に施されていた。その後、熊本市立図書館で原本を閲覧した結果、原本では、１事項が約 23.7 cm×15.5 cm（Ｂ４の約半分の大きさ）の大きさの１枚の和紙の両面に筆で書かれるか、その倍の大きさの和紙を２つ折りにして右頁と左頁に１事項が筆で書かれるかのいずれかであり、記述事項が多い場合は稀に次の和紙に及んでいることが分

かった。すなわち、歴史文書資料室が所蔵する複写物では、原本では１枚の和紙の両面に書かれている記述事項が、閲覧者の便宜を考えてＢ４用紙の片面のみにまとめられていたのである。

⑮　註 10 参照。なお、各書類名の後の括弧内の漢数字は、原本に赤で示されている数字（複数の関連する書類に亘っているものもある）を示し、アラビア数字は註 14 でも指摘した熊本市総務厚生課歴史文書資料室が、複写物の整理のために便宜上施したナンバリングの番号を示している。

⑯　本来であれば原本から図面を撮影すべきであったが、熊本市立図書館が所蔵する原史料『宗教に関する書類 0807』では、和紙に作図してコール師が添付した複数の図面は細かく折って綴じ込まれていた上、経年による劣化も進んでいたため撮影ができなかった。そこで本稿ではやむを得ず熊本市立図書館の許可を得て歴史文書資料室が所蔵している複写物の図面を転載した。

⑰　稿者は明治期、大正期、昭和初期に刊行された熊本市の地図を渉猟したが、明治期と大正期に作成された地図には手取本町に教会堂があったことを確証できるものは見出せなかった。稿者が渉猟した限りでは、コール師が届け出た教会や講義所の番地や敷地を想定可能とさせる地図は、昭和２年刊行の土橋南江著『実測番地入早わかり最新版熊本市街地図』大同印刷（株）が最初である。本稿では熊本県立図書館の許可を得て当該部分を転載した。

⑱　これに対し、伊藤『前掲書』29 頁では「畳 60 枚以上あった」と記されているが、根拠は示されていない。

⑲　ルマリエ神父のファーストネーム、生没年については、福岡教区事務局長青木悟神父様に御教示頂いた。

⑳　ボア師の生没年は資料によって異なるため、福岡教区の教区事務局長青木悟神父様に照会した。同神父様からは、『大名町教会百年史　1887-1986』（大名町カトリック教会　1986 年）と、福岡教区本部事務局諸像「パリ外国宣教会　長崎へ派遣の宣教師一覧」（執筆者・発行年不詳）の記述を根拠に 1888-1977 年と御教示頂いた。

㉑　松村菅和／女子カルメル修道会共訳『パリ外国宣教会年次報告４　1912-1925』聖母の騎士社　1999 年　178 頁には、ボア師が信徒に迎えられた様子が、次のように報告されている。

「　…前略…

故コール師によって創設された熊本の地区は、総代理ルマリエ師の優れた指導のもとにある。そこには、宣教師のレジデンスを持つ四つの宣教所がある。熊本市、琵琶﨑の癩病院、八代と人吉の信者共同体に、…略…。

フレデリック・ボア師は、熊本で 56 の洗礼を記録した。この小さい信者共同体はついに若くて強健な宣教師を持つことのできたのを喜び、彼を最も熱烈に迎え入れ、その好感を絶えず惜しみなく彼に表している。それで新しい牧者は非常に感動し、戦争で費やした５年間を取り戻すために熱烈に働き、日本語をマスターしようと努力している。…下略…」

㉒　宣教百周年記念事業実行委員会編集『前掲書』43 頁によれば、東側に移された木造の旧聖堂は、その後伝道館として信徒の集

会、子供の要理教室等に利用された。

(23) 與助の孫に当たる鉄川進氏（鉄川進一級建築士事務所）や手取教会に資料の有無を照会し、資料がないことを確認した。

(24) 林一馬「鉄川与助のキリスト教会堂関係設計図面―長崎県新上五島町・鯨賓館ミュージアム所管の遺品」『日本建築学会九州支部研究報告』第 47 号　2008 年３月　697、699 頁によれば、鯨賓館ミュージアムが所蔵している與助の図面や葉書等の遺品は、魚目町（現新上五島町）にあった與助の生家の解体工事（1997－98 年頃）時に床の間の天袋から発見され、2005 年に同ミュージアムに寄贈されたものである。

(25) 宣教百周年記念事業実行委員会編集『前掲書』42 頁

(26) 宣教百周年記念事業実行委員会編集『同上』42 頁に掲載された祝歌は以下の通りである。

新聖堂落成式祝歌

（脇田登摩作詞　若狭万次郎作曲）

築かれしこの堂の　祈りの家　主の家
その礎　揺るぎなく　その天井美わしき
主の恵　満てるとは　なりわいの殿堂
…下略…

(27) 現在の泰星学園の前身。

(28) ボア師は、福岡公教神学校の初代校長を５年間務めた後、1936（昭和 11）年 12 月に校長を辞し、一時フランスに帰国して大名町教会の新聖堂建設のための寄付を集めるなどして翌 1937 年に帰朝し、同教会の主任司祭となって早速建設に着手した。設計は前任のベノア神父、建築工事請負人は井上弥六であった。これとは別に司祭館の新築も申請が許可され、総工費 18,000 円で聖堂のみならず司祭館も新たに建設された（以上は大名町教会史編集委員会編『大名町教会百年史　1887-1986』大名町カトリック教会　葦書房　90-91 頁）。

(29) 「棟梁建築家」という用語は、土田充義「教会堂建設に情熱を燃やした鉄川与助」『近代日本の異色建築家』（近江栄・藤森照信編）朝日選書 201　朝日新聞社　1984 年 123 頁で造語されて以降、川上秀人氏（三沢・川上『前掲書』202-203 頁）を始めとする多くの鉄川與助研究者が同用語を用いている。

(30) 喜田信代、羽深久夫「『証明願』における鉄川與助の建築経歴」『日本建築学会大会学術講演会梗概集』（北陸）2002 年８月の注１）によれば、与四郎はさらに再婚したため、再婚者との間の子どもを含めれば、與助は４男４女の長男となる。なお鉄川與助は、「与助」とも表記されるが、喜田信代、羽深久夫、本間博文「江上天主堂の祭壇と鉄川與助の役割」『日本建築学会大会学術講演会梗概集』（九州）2007 年８月　498 頁注１）によれば、戸籍や叙勲関係書類等では「與助」とされているため、本稿でも旧字の「與」を用いた。なお、本稿における與助の略歴は、主に、林一馬、他『鉄川与助の教会建築／五島列島を訪ねて　THE CHURCH ARCHITECTURE OF YOSUKE TETSUKAWA　A VISIT TO GOTO RETTO』LIXIL 出版　2012 年に添えられた「鐵川與助略年譜」に拠った。

(31) 鉄川進「建築家の目から見た祖父・与助の仕事」『同上』70 頁

(32) 雑賀雄二『前掲書』99 頁による。しかし、野原与吉と修業期の鉄川與助との関係は明

瞭ではなく、今後の資料の発見や研究が待たれる。

(33) 正確にはフランス語の発音に近い「プリュ」と表記すべきであろうが、ここでは先行研究の表記に準じて「ペルー」とした。

(34) コウモリ天井、柳梁天井、肋骨天井とも呼ばれる。

(35) 喜田信代、羽深久夫「鉄川與助の明治期の建築経歴と桐古天主堂の請負内容」『日本建築学会系計画系論文集』第566号　2003年４月　注９）によれば、與助の５男である鉄川喜一郎氏が所蔵する與助の手帳には、旧桐教会堂は、「桐ノ浦天主堂」、「桐之浦天主堂」、「桐天主堂」と記載され、『証明願』の方には「桐古天主堂」と記載されているとされる。『証明願』とは、與助が佛人宣教師に個人指導を受けたことを証明するためのものであり、同論考では、１級建築士制度が取り入れられた時期（昭和25年８月～12月）に合わせて作成されたものと推測している。そこには、明治39年の桐古天主堂から昭和25年の慈恵院天主堂までの40件の建築工事実績が記されているため、與助は、桐古天主堂を自らの建築工事実績の最初と見做していたと考えられる。

(36) のちに同学会の終身正会員となる。

(37) 喜田信代、羽深久夫、本間博文「堂崎天主堂における明治39年（1906）と明治41年（1908）の鉄川與助と野原氏との関係」『日本建築学会大会学術講演梗概集』（東海）2003年９月　693-694頁は、喜一郎氏所蔵の與助自身が記した手帳の記述を根拠に、堂崎天主堂建設における野原与吉と鉄川與助との関係を、師弟関係ではなく、対等かそれに近い関係としている。

(38) 板倉元幸『昭和末期の長崎天主堂巡礼』株式会社ART BOXインターナショナル2014年　113頁では、建造は1911（明治44）年とされ、雑賀『前掲書』100頁では、1912（明治45）年とされている。

(39) 雑賀『同上』101頁

(40) 北イタリアのロンバルド地方の石工が考案した小さなアーチを連ねた装飾。

(41) 板倉『前掲書』172頁によれば、旧大水教会堂は50坪、３廊式で、與助が折上天井を展開した最初の聖堂であった。

(42) 雑賀『前掲書』102頁

(43) ハンマー・ビーム架構。但し、頭ヶ島の場合は擬似。頭ヶ島教会堂は、従来のリブ・ヴォールト天井からの脱却を示すターニング・ポイントとなった教会堂。

(44) 雑賀『前掲書』106頁

(45) 渡邊、中川、伊藤「前掲報告書」581～584頁

(46) 與助の孫にあたる鉄川進氏のもとには、黒や赤のアンダーラインが散見される、1916（大正５）年刊行の阿部美樹志『鐵筋混凝土工學』という専門書が残されているという。林一馬、他『前掲書』57頁、71頁

(47) 鉄川進「前掲論文」『前掲書』71頁

(48) 川上秀人「長崎の教会建築史」三沢・川上他『前掲書』155-156、158、199-202頁

［その他の参考文献］

・カトリック浦上教会『浦上天主堂写真集』カトリック浦上教会　1999年（第１刷）2007年（第４刷）

・横手一彦（著）　高原至（写真）　ブライアン・バークガフニ（訳）『長崎　旧浦上天主堂1945-58 ―失われた被爆遺産』岩波書

店　2010 年
・「日本に眠るパリ外国宣教会宣教師列伝」（五十音順）
（http://www.geocities.co.jp/rainichi20051/ Other_Countries/ParisRetsuden.doc）
・“Paris Foreign Missions Society（M.E.P.）”
（http://www.gcatholic.org/orders/050.htm）
・熊本日日新聞情報文化センター『熊本市制 100 周年記念　図説　熊本・わが街』熊本日日新聞社　昭和 63（1988）年

［図版典拠］

図１：伊藤誠二監修『萌芽　福岡教区 50 年の歩み』カトリック福岡教区　昭和 53 年　28頁
図2-1：宣教百周年記念事業実行委員会編集『宣教百年の歩み　手取カトリック教会宣教百周年記念誌』手取カトリック教会　1989 年　38 頁
図2-2：伊藤『前掲書』29 頁
図３：「熊本市政資料」の原史料番号 0807「宗教に関する書類」（七）（42）
図４、７：土橋南江著『実測番地入早わかり最新版熊本市街地図』大同印刷（株）昭和２年　それぞれ手取本町部分　上林町部分
図５：「熊本市政資料」の原史料番号 0807「宗教に関する書類」（58）
図６：同上（54）
図８：宣教百周年記念事業実行委員会編集『前掲書』28 頁
図９：㈲鉄川進一級建築士事務所所蔵・提供
図10：鯨賓館ミュージアム所蔵・提供
図11～20：稿者撮影

［謝辞］

資料の閲覧や写真撮影、画像提供、複写・掲載許可については、以下の機関や司教区本部、教会、事務所、個人に御高配や御協力、御提供を頂いた。記して深謝申し上げたい。

熊本市総務厚生課歴史文書資料室（佐川様）　熊本県立図書館（川元様）　熊本市立図書館　福岡司教区本部福岡司教区事務局（青木悟神父様）　手取カトリック教会　鯨賓館ミュージアム（原様）　㈲鉄川進一級建築士事務所（鉄川進様）

また特に、生没年やファーストネームが曖昧ないしは不詳のパリ外国宣教会神父については、福岡司教区事務局長青木悟神父様に御教示頂いた。重ねてお礼申し上げたい。

図１　手取教会初代司祭コール師
（パリ外国宣教会神父）

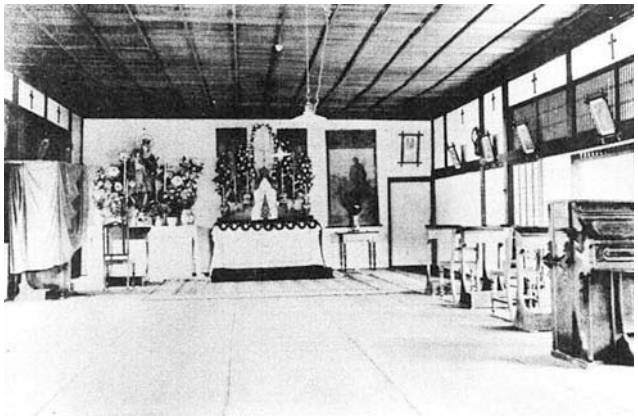

図2-1（上）、2-2（下）　コール師時代に建てられた設計・施工者不詳の最初の木造の手取教会堂の外観（明治42年撮影）とその堂内（大正時代）（右）の様子

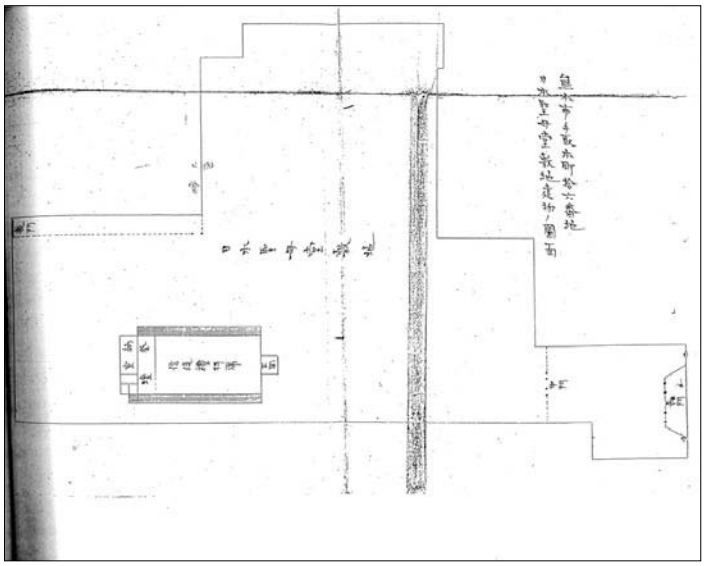

図３　コール師が1899（明治32）年に熊本市役所に届け出た手取教会の敷地と最初の木造教会堂の平面図、並びに教会堂部分の拡大図（右）

図４　1927（昭和２）年当時の手取本町付近の番地入り地図（矢印部分が教会の敷地）

図７　1927（昭和２）年当時の上林町付近の番地入り地図（矢印部分が講義所の敷地）

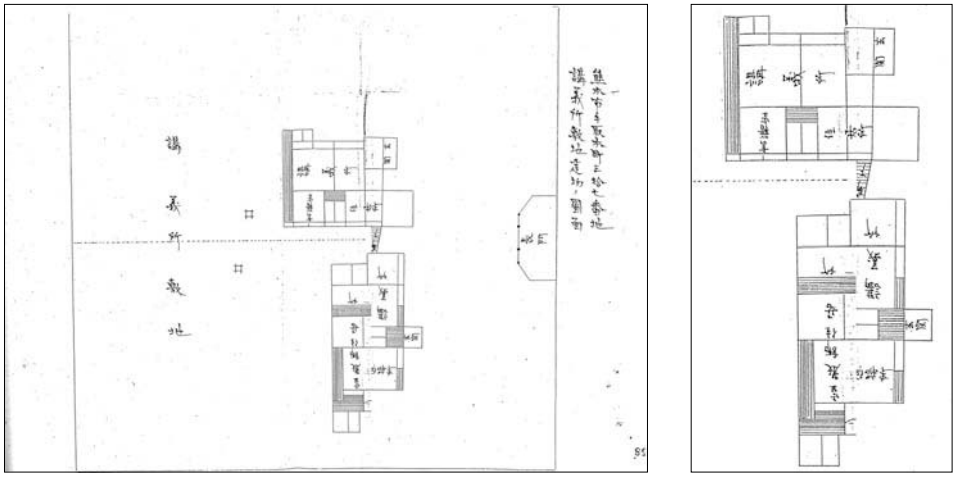

図５　コール師が1899（明治32）年に熊本市役所に届け出た手取本町37番地の講義所の図面とその拡大図（右）

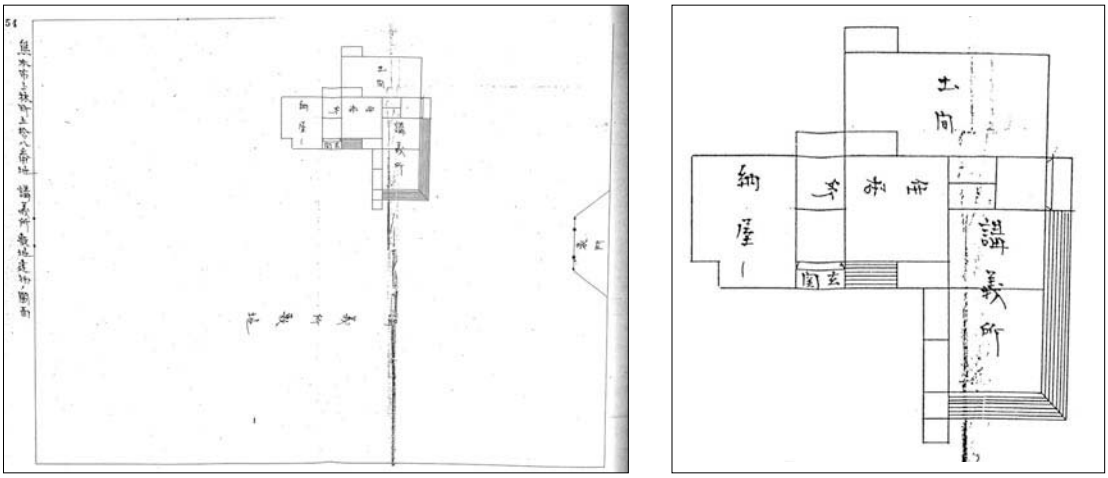

図６　コール師が1899（明治32）年に熊本市役所に届け出た上林町58番地の講義所の図面とその拡大図（右）

図８　手取教会第４代司祭ボア師（パリ外国宣教会神父）

図９　1918（大正７）年39歳頃の鉄川與助

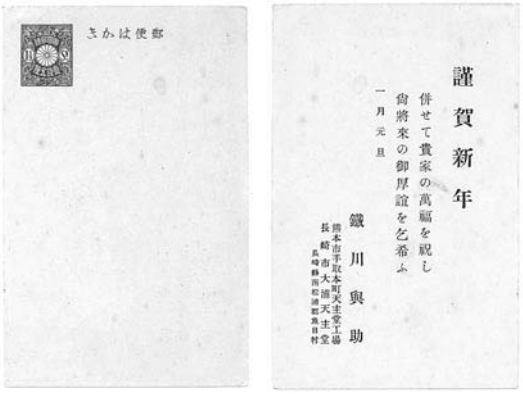

図10　手取教会堂建設時に與助が使用していたと思われる年賀状（未使用）
左：表　右：裏

図11　冷水カトリック教会堂（木造）
設計・施工：鉄川與助　1907（明治40）年　長崎県

図12　青砂ヶ浦カトリック教会堂（煉瓦造）
設計・施工：鉄川與助　1910（明治43）年　長崎県／国指定重要文化財

図13　今村カトリック教会堂（煉瓦造）
設計・施工：鉄川與助　1913（大正２）年　福岡県／県指定有形文化財

図14　田平カトリック教会堂（煉瓦造）
設計・施工：鉄川與助　1918（大正７）年　長崎県／国指定重要文化財

図15　頭ヶ島カトリック教会堂（石造）
設計・施工：鉄川與助　1918（大正７）年　長崎県／国指定重要文化財

図16　紐差カトリック教会堂（鉄筋コンクリート造）　設計・施工：鉄川與助　1929（昭和４）年　長崎県

図17　平成時代に入った２代目（現在）の手取教会堂（鉄筋コンクリート造）
設計・施工：鉄川與助　1929（昭和４）年

図18　２代目（現在）の手取教会堂の側壁に設けられた出入口

図19　２代目（現在）の手取教会堂の３身廊の堂内

図20　２代目（現在）の手取教会堂の花柄を意匠化した天井レリーフ装飾